

本日は最後まで、こんなに大勢の皆さまにご清聴いただき、ありがとうございます。安崎先生から、たいへん適切な要約とコメントをいただきましたので、私から申し上げることはほとんどありません。とりあえずこれまでのお話を振り返って、そこからどんなことを考えられるのだろうかということを、少し述べてみたいと思います。

それぞれの講演者のお話をうかがってみて、モノとお金についてはEUのなかで急速な統合をしている。けれどもマーケティングですとか、人事労務には触れていませんでしたが、そういった面では国ごとのローカルな側面を尊重しなければならないということでした。出身の業界によって、EUを見る目も少しずつ違うんだなということも感じました。最後の柴田さんのお話では、文化やチャリティーなどをふくめた現地化の必要性も出てきました。

安崎さんがおっしゃるように、グローバリゼーションとローカリゼーションの問題は重要でしょう。このふたつを合わせた「グローカリティー」という言葉を、早稲田大学ではこれまでに使って来ました。一方で世界を見ながら、他方では現地をみるというのは、一見矛盾しているようですが、我々はこれからビジネスをふくめて、このような見方、かかわり方をしていかなければならない。こうした面では、いろいろ行動しにくい部分があることもよくわかりました。

ヨーロッパについては、国ごとに考えていく必要があるというお話が出ました。我々はとするとヨーロッパを一様な全体として見ますけれども、実際にはイギリスとフランスとドイツだけでもずいぶん違いますし、イタリアもスペインも、北欧の国々もそれぞれに異なっています。我々は「欧米」という言葉をよく使います。大学の先生もまた、「欧米社会はこうこうで、日本はこれこれだ」といった言い方をします。しかし同じヨーロッパのなかでも、国ごとに個性があり、国によってまるで違うことが多いのではないのでしょうか。このようなところにとっても関心を持ちましたし、もう少し具体的にうかがえたらよかったように思います。

EUがまとまってきたというのは、長い視野で考えてみた場合、ローマ帝国の再興ではないのかという見方もできます。考えてみると、ローマ帝国があって、それが東ローマ帝国、西ローマ帝国と分かれていったわけですが、アレクサンダー大王があちこちを攻めたので、現在の東欧やトルコまでが当時のローマ帝国のなかに入っていたのです。EUもそのあたりまで広がるのかなと思ったりもします。要するに、歴史的な長いスパンがあって、そのなかからEUが出てきたのだということです。

いずれアジアもEUと同じような形で、まとまっていかなざるをえないでしょう。そのときヨーロッパを眺めて、「ああいうのがいいねえ」というのではなく、なぜEUはあのような形でまとまったのかを考えてみる必要があると思います。今後日本の我々がどんなスタンスで世界に向かって歩いていけばいいのだろうかと考え、この所が非常に難しい。アジアにおいては、中国が経済的・文化的に主要な地域であることは間違いありません。日本はこれから、経済的にも政

治的にもどのような形で中国と付き合っていくのか。さらにアメリカやヨーロッパとも、どういう関係をもっていくべきなのか。この点をこれからは十分に考えていくべきだろうと思います。

グローバリゼーションという言葉によって、地球が一様になってしまったように語られることがありますが、そんなことはない、皆さんよくご存知だと思います。第二次大戦後はアメリカがまず第一であった。第二にヨーロッパがあった。現在では中国をふくめたアジア地域がこれに続いている。今後は中近東のイスラム圏に対する理解が必要になるし、インドも少しずつ成長してきていますので、22世紀には間違いなくいっそうインドが重要になるでしょう。

日本はこの先これらの国々との間でどういう関係を長期的に作り、世界においてどのような貢献をしていったらいいのか。どのような形で政治、経済、文化を取り結んでいったらいいのか。これをもっとしっかりと考えていくべき時代に入っていると、お話をうかがいながら思った次第です。教育の分野でもそうですし、ビジネスの分野でもそうですが、それぞれの場で得た経験や知識を日本の中で広く共有し、共通のベースにしていかなければ、真の意味でのグローバルな活動が出てこないように思います。

国際社会での日本人は、外国の人たちに溶け込まず、発言もせず、主張もないかのようにしばしば言われます。しかし実際には、世界各地でこんなに多くの日本人が、さまざまな苦勞を重ねながら実に頑張って多様な活動を続け、大きな貢献をしておられる。本日のお話からは、それがよくわかります。

先日テレビで、ゴビ砂漠で植林活動に取り組む日本のグループの話をやっていました。このように、きわめて地味な活動を続けていくなかに、ビジネスもあれば文化もあるということが重要ではないでしょうか。現地にもプラスになり、日本にも長期的にプラスになる活動のありかたを見いだす責任を、我々はいま課せられているのだと思います。

厚東 偉介（コウトウ・イスケ）

1966年、早稲田大学第一商学部卒業。71年、同学大学院商学研究所博士課程を単位取得退学し、立正大学経営学部専任講師に。95年より早稲田大学商学部教授。